

ずいそう

クレー射撃とわたし

中山 由起枝



1. クレー射撃との出会い

1996年、真っ黒に日焼けした洒落っ気ゼロのソフトボール選手のもとに、日立建機の人が訪ねてきました。「クレー射撃をやりませんか」、「オリンピックをめざす逸材を発掘しています」、「中山さんにうちの会社にぜひ入ってもらいたい」と、突然得体のしれない会社と、全く知らない競技の話が舞い込んできたのです。

「クレー射撃?????何を言っているの?」最初に話を聞いたときは「変な人たちが勧誘しに来たな…」としか思いませんでした。

いくら断っても「入社式当日まで待ちます」と、高校へ幾度も足を運んで来ては私を説得していました。内心「この人たち必死だな…」と感じたのを覚えています。個人競技に転向して人生の責任を取ってくれるのか、なぜ私なのか、なぜクレー射撃でオリンピックなのか、疑問はたくさんありました。

しかし、その疑問を跳ね返すような回答で、「大丈夫、任せて下さい」と言い切っていました。なんだか怪しいけれど何故か興味を抱く話ばかりで面白い…完全に日立建機の作戦にはまったような感じではありましたが、決め手は「挑戦」という言葉でした。のちに分かったことですが、スカウトをしてきた故白木大二郎氏は、日立グループのスポーツ部門創設者として名が通っていたそうです。そんな情熱を持つ人が目を付けた選手を簡単に諦めるはずがありません。その後はとんとん

拍子で、言われるがまま入社が決まり、全てのルールが敷かれていきました。

日本では、銃砲刀剣類所持等取締法に基づき、猟銃は18歳未満の所持はできません。早生まれの私は入社するまでに銃を所持することは不可能でした。触れたことも観たこともないスポーツに想像だけを膨らませ入社したのです。そんな状況の中、射撃の強豪国イタリアへ射撃留学の計画がなされていました。そこで初めてクレー射撃に出会い、私の人生が大きく変わっていきました。

2. イタリア射撃留学

1997年に入社し、同年7月にイタリアへ約1年間の射撃留学のため渡航しました。留学前に運転免許の取得、100時間の語学勉強、新入社員研修を課せられました。実際に通用したものは数少なく、左ハンドルミッション車での運転は苦勞し、現地人が話すイタリア語も理解できず、しばらくは数字と挨拶に加えジェスチャーや雰囲気だけでやり取りをしていました。

現地到着後、初めに行ったことは世界でも有名なベレッタという銃器メーカーの工場に行き銃床を作成することでした。銃を手にして撃った時は、衝撃と発砲



写真-1



写真-2

音に驚きましたが、その瞬間は感動すら覚えました。

瞬く間に時は過ぎ、3か月が経過する頃には耳で聞いて言葉が何となくわかるようになり、半年後には生活レベルまで対応できるようになりました。通貨はイタリアリラの時代で物価も安く、ピザは宅配で一枚350円くらいでした。10代で文化の違いや人種の違いを五感で感じられたことは大きく、この後の躍進劇へと繋がっていくこととなります。留学期間が終わる頃には、「何とかなるさ」と何事に対しても度胸が付き、射撃もイタリア国内で優勝するレベルに到達していました。

3. デビュー

留学期間中の一時帰国時に銃の所持許可を取得しました。1998年秋、国内ナショナルチーム選考会ではトップ成績をおさめ、翌年5月に開催されたワールドカップ熊本大会に日本代表として選出されました。国際大会デビュー戦、1ラウンド目から満点を出し、トータルスコアは日本新記録をたたき出しました。日本人選手唯一のファイナル進出を果たし4位となりました。そして、翌月に行われたワールドカップイタリア大会では3位に入り、シドニーオリンピックの出場権を獲得したのです。クレール射撃を始めて1年11か月でした。日立建機は大当たり、博打に勝ったようなものでしょうか。発掘から始まり、斬新な計画とさじ加減が絶妙に合致したのかもしれません。それから私は、東京2020大会まで5度もオリンピックの舞台に立つことになるのです。

4. 夏季オリンピック最多5回出場

24年間も競技を継続すると誰が予想したでしょう。長い競技キャリアを通し、夏季オリンピック日本人女子最多の5回出場を成し遂げました。この間、ライフ



写真—3

イベントでは結婚、出産、離婚を経験し、子育てと競技の両立を経てきました。また大学院進学を決断し異なる分野のステージへも進みました。2年間の自己研鑽の日々、競技も続行しながら東京をめざしました。

東京オリンピックへの道のりはこれまで以上に厳しく、9回裏ツーアウト、フルカウントまで追い込まれ、逆転満塁ホームランを放ったかのような奇跡を起こし、東京大会への切符を勝ち取りました。その後、新型コロナウイルスによって大会は延期になりましたが、これにより波乱なドラマが私を待ち受けていたのです。東京オリンピックの出場権を獲得したのち、私は脳神経疾患である「動作特異性・局所性ジストニア」という病気を患い、アスリートキャリアのラストを東京で迎えることとなります。東京2020大会を集大成として挑み、2022年3月末に競技者としての活動を終了するまでの奇跡がまだ残っていたのです。

5. 病気

「引き金が引けない…。」2020年春を迎えるころ、決まった動作時だけ症状が出はじめ、最終的には引き金が全く引けない状態に陥りました。長年にわたり繊細な動きや特定の動きを反復かつ高頻度で行ってきたことが原因で、脳の誤作動による神経の病気が発症してしまいました。射撃の選手としての例はなく、診断が下ったときに有効とされていた改善策は手術のみで、たとえ手術しても成功したかどうかは時間が経過しないとわからない、ベストパフォーマンスに1年で戻ることはない、と決して明るくはない未来を告げられました。それでも、「引き金が引けるようになるか



写真—4

もしれない」「オリンピックの舞台に立てるように最後までがんばりたい」と、2020年7月16日に手術をしました。術後はリハビリとトレーニングを重ねていきましたが経過が思わしくなく、挫折感や絶望感、焦りが生まれ精神的に追い込まれていきました。術前は希望が持てず…そして術後は自分の記憶と現実にギャップが生じ苦しみました。何度泣いたか分かりません。何度フラッシュバックに恐怖を感じたか分かりません。

6. 東京 2020 オリンピック大会

術後半年が経過した2021年1月、思いのまま撃てない現実に嫌気がさしていました。練習中、涙でいっぱいになり標的が見えないこともありました。同年5月、東京オリンピックのリハーサル大会を迎えるころ、自信を喪失し心は折れていました。「自国開催の代表選手として胸を張って戦うことはできない」と悲観的な感情が先行し、チーム監督に現状報告と代表辞退を申し出ました。今思えばそれは私が出したSOSだったと思います。監督から「チーム中山」を作る提案があり、「何があってもサポートするから。これまで長年日本の射撃界を引っ張ってきてくれた功労者。今切る必要もないし、あなたの辞退を受け入れることもしない。あなたが取ってきた権利なのだから最後までやり遂げよう。」と監督も私も号泣し、最後まで戦い抜く約束を誓いました。

そんな曲折を経て迎えたリハーサル大会で優勝し、

徐々に自信を取り戻していきました。オリンピックまで残り2か月、やれること全てをやりました。

東京大会は、個人戦よりも夫とペアで闘う混合戦に重きを置いていました。これは東京大会から正式採用された種目で、「東京大会をめざそう、手術を受けよう」と強い気持ちでいられた一つの理由でもあります。

本番では目標スコアを大きく更新することができ、なんと5位入賞を果たしました。98.7%という命中率でこれまでの最高得点に並ぶスコアを出しました。諦めずにやり遂げられた達成感と、集大成として挑んだ東京の舞台で「射撃の神様君臨」とまで思えた瞬間でした。そしてスポーツの力や価値を実感し、チームみなで抱き合って感動の涙を流しました。クレール射撃との出会いによってオリンピックストーリーを作りあげ、苦楽を味わい成長した24年間でした。

一つの事を成し遂げようとするとき、前に突き進むには覚悟が必要です。私を信じ、支えてくれた仲間たちと深い絆で繋がっている家族の存在は、奇跡を起こさせてくれました。18歳から42歳になるまで長い間アスリートキャリアを通し様々なことを経験しました。

今後は後進育成に携わり、社会貢献活動にも力を入れ、スポーツの素晴らしさを伝えていくことがアスリートとして最後の使命だと感じています。そしてその信念を持ち続け、私らしくベストな選択をしながら生きていきたいと思っています。

—なかやま ゆきえ 日立建機株式会社 人財本部 人財開発統括部 教育企画グループ—